The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪方言におけるノダ補充疑問文と終助詞ナ
Author(s)	高木, 千恵
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2019, 16, p. 15-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73637
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 16 号（2019 年 7 月）15-34

大阪方言におけるノダ補充疑問文と終助詞ナ

高木　千恵

【キーワード】大阪方言、補充疑問文、ノダ相当形式、終助詞ナ、訝りの表明

【要旨】
本稿では大阪方言の「ノダ補充疑問文」（ノダ相当形式を伴った補充疑問文）とこれに生起する終助詞ナを対象に、ノダ相当形式のバリエーションと疑問文の用法の関連を整理し、そのうえでナのもつ文法的な意味について考察した。本稿で明らかになったのは次の点である；(a)［質問］［詰問］［非難］［反語］というノダ補充疑問文の四つの用法について、ノダ相当形式のバリエーションのうち、ンが［質問］、ノンが［質問］［詰問］、ネンが［詰問］［非難］［反語］に偏って使用される、(b) 終助詞ナと結びついた形式（ンナ・ノンナ・ネンナ）ではその偏りが軽減され、使用が 4 用法にまたがる、(c) ンナ・ノンナ・ネンナには、聞き手の言動の前提についての問い、回答の催促、驚きの表示、望ましくない状況に対する嘆きなどのさまざまな使い方があるが、いずれもナの「訝りの表明」という基本的な意味から説明できる、(d) 補充疑問文の述語形式に由来するナが、その出自を離れ、話し手の心的態度を伝達する終助詞となっている。

1.　はじめに

本稿では、大阪方言におけるノダ相当形式を伴った補充疑問文（以下、「ノダ補充疑問文」と呼ぶ）と、これに生起する終助詞ナの意味用法の記述を試みる。筆者は拙稿（高木 2018）において大阪方言の疑問文の構造を記述し、補充疑問文に生起するナの統語的な特徴を整理した。そして、補充疑問文に生起するナが平叙文に使われるナとは異なる統語的特徴を持っていることを明らかにし、疑問文のナが断定辞の条件形ナラに由来すると考えられることを指摘した。しかしながら当該のナの文法的な意味については考察が及ばず、課題として残された。本稿はこれに取り組むものである。

以下、2 節で先行研究と問題のありかを整理し、本稿の目的を記す。本稿が扱うナはノダ補充疑問文にのみ生起するので、3 節でまずその構造と用法を整理し、続く 4 節でナの接続や文末イントネーションと用法を検討する。それぞれの用法から導かれるナの文法的意味について 5 節で考察し、6 節でまとめと今後の課題について述べる。

2.　先行研究と問題のありか

本節では、補充疑問文と終助詞ナについて、大阪方言を取り上げたもの（2.1 節）と他方言を扱ったもの（2.2 節）に分けて先行研究を概観し、問題のありかと本稿の目的について述べる（2.3 節）。

2.1.　大阪方言の補充疑問文と終助詞ナ

先にも述べたが、本稿で扱う大阪方言の終助詞ナは、疑問文のなかでもノダ補充疑問文にのみ生起する。大阪方言には複数のノダ相当形式があるが、補充疑問文に使われるのはノ(ヤ)・ン(ヤ)・ノン・ネヤ・ネンといった形式である。

（1）a. なんで無い｛ノ／ン／ノン／ネン｝。（なぜ無いの）[1)]

b. なんで無い｛ノヤ／ンヤ／ネヤ｝。（なぜ無いんだ）

このうち、ナが後続しうるのはン・ノン・ネンの 3 形式に限られる（高木 2018）。

（2）a. なんで無い｛*ノ／ン／ノン／ネン｝ナ。

b. なんで無い｛*ノヤ／*ンヤ／*ネヤ｝ナ。

（2a）にあるとおり、疑問文のナは断定辞を介さずンに直接つくことができるが、これは平叙文に使われるナとは異なる統語的特徴である。次例に示すように、平叙文において終助詞ナがノダ相当形式につくときは必ず断定辞のヤを介さなければならない。

（3）ここには無い｛*ン／ンヤ｝ナ。（ここには無いんだね）

高木（前掲）ではこの点に注目し、疑問文に使われるナが断定辞の条件形ナラに由来するものと考えられることを指摘した。ただし先述のとおり、同論文は疑問文の構造とナの統語的な特徴の記述に留まり、ナの文法的意味については扱っていない。

疑問文における「ノダ相当形式＋ナ」については野間（2014）にも言及がある。野間（前掲）はノダ相当形式としてのノンの記述のなかで「ノンナ」に触れ、補充疑問文に使われること、「反語的な含み」のある疑問文であること、「ンナ」「ネンナ」といった形式も存在することを指摘している。ただしンナ・ノンナ・ネンナの違いについては言及がなく、ナを伴う場合とそうでない場合における疑問文の意味の違いも検討されていない。

2.2.　他方言における補充疑問文と終助詞ナ

日本語諸方言の疑問表現について整理した井上・小西（2006）は、補充疑問文の構造として述語が条件形をとる方言は中国・四国地方に広くみられると述べている。国立国語研究所が刊行した『方言文法全国地図』第 4 集の 256 図「（それは）何か」によると、「ナンナラ」という回答が岡山県に広く分布しているほか、広島県や徳島県・高知県にも数地点みられる。同図において和歌山県や佐賀県・長崎県に分布する「ナンナ」も、断定辞の条件形に由来するものと考えられる。

三宅（2014; 2015）は、岡山方言の補充疑問文（三宅論文では「不定語疑問文」）について、どの品詞が述語に来ても必ず条件形をとることを指摘し、真偽疑問文との構造の違いが（標準語に比べて）見えやすい方言であると述べている。一方、岡山県備前方言における補充疑問文の構造の変化を扱った岡本（2015）では、若年層においては述語の条件形が必須でなくなり、使用語形がンナラに偏っていること、またンナラを用いた補充疑問文が質問ではなく

1）　以下、例文は原則として漢字かな交じりの方言文とし、注目すべき箇所をカタカナで記す。また必要に応じて末尾の（　）内に標準語訳を記す。例文中の「*」は当該形式が不適格であることを、「#」は文脈上適切でないことを表す。不適格とまではいえないが不自然であることを示す際には、語頭もしくは文頭に「?」を付す。

非難を表すものとして機能していることを指摘した。岡本（前掲）はこのことについて、述語の条件形であったナラが再分析され、ナラ＞ナー＞ナのような音の縮約による異形態を形成しつつ終助詞化した結果であると解釈している。

このほか、和歌山市方言を対象に、補充疑問文に現れる終助詞ナを記述したものに山口（2013）がある。山口は、ナにナラという異形態があること、体言相当の語にしか接続しないことを指摘したうえで、その基本的な意味について次のように述べている。

> 話し手が、自ら判断できない不明な情報に遭遇し、自身の中でもそれに関して思案しながら、その「疑い」の意を表出する
>
> （山口 2013:60）

和歌山市方言のナは、ノダ相当形式だけでなく広く体言に接続することができるという点で大阪方言とは異なるが、山口の述べる「自ら判断できない不明な情報に遭遇し、自身の中でもそれに関して思案しながら」という部分は大阪方言にも通じるように思われる。ただし山口は、ナが付加された疑問文は（そうでない場合に比べて）問いかけ性が低いとしてその基本的意味を「疑いの表出」であると結論づけており、この点においては大阪方言のナと性格が異なるようである（次節も参照）。

2.3. 問題のありかと本稿の目的

ここまで見てきたように、大阪方言の補充疑問文に使われるナについては、その統語的な特徴が整理された段階であり、意味の面については明らかでない。野間（2014）はンナ・ノンナ・ネンナに「反語的な含み」があるとしているが、実際には、ン・ノン・ネンのいずれのノダ相当形式を用いるかによってニュアンスに違いが感じられる。たとえば次の（4）の場合、ンナが聞き手に対して情報を要求していると解釈されるのに対して、ノンナやネンナは、質問よりも非難や反語としての解釈が優先されるように思われる。

（4）スーツなんか着て、どこ行く｛ンナ／ノンナ／ネンナ｝。
　　（スーツなんか着て、どこに行くの）[2)]

したがって、ンナ・ノンナ・ネンナを単に「反語的にはたらく」形式としてまとめて扱うことは適切とはいえず、3 形式それぞれについての具体的な記述が求められる。

加えて次例に示すように、ノダ相当形式単独でも非難や反語としてはたらくことがあるという問題もある。

（5）［共同作業に加わらず見ているだけの人に向かって］
　　何してんネン。手伝いーや。（何をしているの。手伝いなよ）　［非難］

（6）［どこかへ出かけるのかと訊かれて］
　　出かけへんわ。こんな夜中にどこ行くネン。　［反語］
　　（出かけないよ。こんな夜中にどこへ行く［という］の）

このことから、まずは、ナのつかない場合におけるノダ補充疑問文の用法を把握し、そのう

2）標準語は形態的にナに相当する終助詞をもたないため、ここではノダ相当形式単独の例と同じく「の」による訳を付けている（以下の例文も同様）。訳語に「のだ／んだ」ではなく「の」を当てるのは、ン・ノン・ネンが形態として断定辞を含んでいないことによる。

えでそれぞれのノダ相当形式にナのついた疑問文に焦点をしぼり、その用法の観察からナの文法的意味について考える必要があるものと思われる。

大阪方言のナは、ノダ相当形式にのみ後接するという点では岡本（2015）の岡山県備前方言（若年層）と共通点がある。ただし岡本（前掲）は、ンによる補充疑問文だけでは非難を示すことができず、終助詞化しつつあるナラがその機能を担っていると述べており、この点は大阪方言と異なる。先に述べたとおり大阪方言はノダ相当形式のバリエーションによって補充疑問文の用法に偏りがあると考えられることから、「非難」そのものをナの意味用法とすることは適当ではないと思われる。

意味の面においては、和歌山市方言を扱った山口（2013）の記述に参考になる部分があると思われる。ただ、和歌山市方言のナには大阪方言にない使い方があり、同じ文法的意味を有しているかどうかは検証の余地がある。山口（前掲）によれば、和歌山市方言のナは「聞き手が知り得ない、あるいは、聞き手が知っていることが不確実な情報」を命題にとることができるという。

（7）［友人の太郎の態度について母親に愚痴をこぼして］

A：どうして太郎っていつもあんなにぼーっとしているンナ。

（どうして太郎っていつもあんなにぼーっとしているんだ？）

B：さあ。でもまあ、本人に聞いてみないとわからないけどね。

（山口 2013:60、例文（25））

山口は（7）のような例について、話し手が「必ずしも聞き手に対して明確な答えを要求しているのではな」いとし、「話し手の「疑い」の表出に対する聞き手の何らかの反応を求めているという程度の態度を示している」と述べ、ナのもつ「独話的機能」と呼んでいる（p.60）。大阪方言のナにはこのような機能がなく、「なんで太郎っていつもあんなにぼーっとしてるンナ」と問えるのは、話し手が聞き手を、当該のことがらについて情報を持っている人と見なしているときだけである。

以上の点をふまえて本稿では、ノダ補充疑問文のもつ用法を整理し、これに後続するナの意味記述を行いたい。またその前提となるノダ補充疑問文の構造やナの接続・イントネーションについても、先行研究を参照しつつ整理する。

以下、本稿では大阪方言（摂津方言）を母方言とする筆者の内省をもとに記述を進める。筆者は 1974 年兵庫県神戸市生まれで、3 歳から現在まで、約 1 年間の留学期間（2002 年 2 月～2003 年 3 月）を除いて大阪府豊能町在住である。

3.　ノダ補充疑問文の構造と用法

本節では、ノダ補充疑問文の構造と用法について整理する。2.1 節でも述べたとおり、複数ある大阪方言のノダ相当形式のうち、補充疑問文においてナとともに使われるのは、ン・ノン・ネンの 3 形式である。したがって本節でもこの 3 形式にしぼって記述を行う。ノダ補充疑問文全体の用法の記述としては不足があることと思うが、これについては稿を改めて論じたい。

3.1.　ノダ補充疑問文の構造

各形式の用法について論じる前に、それぞれの統語的な特徴ならびにイントネーションについてまとめておく。ン・ノン・ネンは、前接語についての品詞的な制約を持たないが、タ形との接続には注意を要する。すなわち、ンは基本形とタ形のどちらにもつくことができるが、ノンはタ形との接続が難しい（野間 2014:30）。またネンもタ形につくことができず、代替形式として接辞のテン（*-(i)teN*）が使われる（野間 2013 も参照）。

（8）a. いつ行くン。
　　b. いつ行ったン。
（9）a. 晩ご飯誰と食べんノン。（晩ご飯は誰と食べるの）
　　b. *晩ご飯誰と食べたノン。
（10）a. 財布どこにあんネン。（財布はどこにあるの）
　　b. *財布どこにあったネン。
（11）財布どこにあっテン。（財布はどこにあったの）

（9a）（10a）にあるように、基本形が「～る」の形を取る動詞（いわゆるラ行五段動詞、一段動詞および不規則動詞）や派生接辞にノン・ネンが続く場合は前接語が撥音化することが多い。ただし義務的なものではないので、「食べるノン」「あるネン」という接続のしかたも不適格ではない。

一方、動詞否定辞との接続ではンに制限があり、否定辞の基本形（ン・ヘン）とンは共起しない。野間（2014:26-27）も指摘するとおり、これは撥音の連続が許されないためである。

（12）a. なんでわからん｛*ン／ノン／ネン｝。
　　b. なんでわからへん｛*ン／ノン／ネン｝。　（なぜわからないの）

文末イントネーションについては、ン・ノンには制約がなく、上昇調になることもあれば上昇しない（自然下降する）場合もある（高木 2018）。一方ネンは上昇調をとることができない。テンも同様である。以下、例文文末のクエスチョンマーク（？）は上昇調を示す。

（13）a. 何時頃帰ってくるン？
　　b. 何時頃帰ってくるン。
（14）a. なんで知ってんノン？
　　b. なんで知ってんノン。（なぜ知っているの）
（15）a. *どこ行くネン？
　　b. どこ行くネン。
（16）a. *あいつどこ行っテン？
　　b. あいつどこ行っテン。（あいつはどこへ行ったの）

3.2.　ノダ補充疑問文の用法と形式の偏り

ここでは、前節で述べたような構造をもつノダ補充疑問文が具体的にどのような用法をもっているかを整理し（3.2.1 節）、ン・ノン・ネンの各形式がどの用法で用いられやすいかについて検討する（3.2.2 節）。以下で述べる「用法」のなかには、文脈に依存する「語用論的な効果」とする方が適切にみえるものもあるかもしれないが、後述のとおり、大阪方言に

おいてはノダ相当形式のバリエーションとそれぞれの用法にある程度の結びつきがあると考えられることから、ここでは便宜的に「用法」と称する。また 3.2.1 節で示す例文はそれぞれの用法に典型的に用いられるノダ相当形式によって示し、他の形式の使用可否については 3.2.2 節でまとめて示す。

3.2.1.　ノダ補充疑問文の用法

本稿では、ノダ補充疑問文の用法を［質問］［詰問］［非難］［反語］の四つに分類する。前二者が聞き手に情報を要求するものであるのに対して、後二者は情報要求という疑問文の中心的な機能を欠いている。以下、順に説明する。

疑問文は、話し手にとって不明なことがらについて聞き手に情報を要求する、すなわち［質問］をその中心的な機能としてもつ。ノダ補充疑問文による［質問］は、ある事態の成立を前提に、その事態成立に関わる、話し手にとって不明なことがらについて、聞き手の有する情報を要求するものである。

（17）明日何時に起きるン？　［質問］

（18）学祭のライブ、誰来るン。（学園祭のライブ、誰が来るの）　［質問］

（19）あの店、何時までやってんノン？（あの店、何時までやっているの）　［質問］

上例はそれぞれ、「起床すること」「学園祭のライブに有名人が来ること」「店の営業」といった事態の成立を前提とし、そのうえで、話し手にとって不明である「いつ」「だれ」「いつまで」という情報を聞き手に求めている。

次に［詰問］は、情報要求に加えて話し手の心的態度の表示にも関わる疑問文である。次例を見られたい。

（20）［帰ってきたばかりなのにまた出かけようとしている家族に］
もうご飯やのに、どこ行くノン。（もうご飯なのに、どこへ行くの）　［詰問］

（21）［なかなか注文が決まらない聞き手に］
何飲むネン。はよ決めーや。（何を飲むの。早く決めなよ）　［詰問］

（20）（21）は行き先や聞き手の注文内容という話し手にとって不明なことがらについて聞き手に情報を求めており、この点で［質問］と共通している。しかし［質問］とは違って、期待に反してまた出かけようとしたり、なかなか注文が決められずにいたりしている聞き手に対する批判的な態度が示されてもいる。このような、情報要求に加えて聞き手に対する話し手の批判的な態度が表される疑問文を本稿では［詰問］と呼ぶ。

［非難］［反語］は、情報要求としてはたらかないタイプの疑問文である。［非難］は、先に挙げた［詰問］のもつ二つの機能のうちの、聞き手に対する話し手の批判的な態度の表示に特化した疑問文である。たとえば次の（22）では聞き手がものを食べていることが、また（23）では聞き手がまだ寝ていることが非難の対象となっており、「何」や「いつまで」についての情報は求められていない。

（22）ちょっと、何食べてんノン。ここ飲食禁止やで。　［非難］
（ちょっと、何を食べているの。ここは飲食禁止だよ）

（23）お前、いつまで寝てんネン。もう九時やぞ。　［非難］

（お前、いつまで寝ているの。もう九時だぞ）

一方の［反語］は、話し手の意見を強く主張するはたらきをもつ疑問文である。安達（2005:35）は標準語における「反語解釈」について、「話し手が、疑問文の形式をとりながらも、質問に対する答えをすでに知っており、それを聞き手に強く主張するという機能を持つ」と述べているが、大阪方言のノダ補充疑問文にもこの機能をもつものがある[3)]。

（24）A：え、わたしがやんの？（え、わたしがやるの）
　　B：当たり前やん。他に誰ができんネン。　［反語］
　　（当たり前じゃない。他に誰ができるの）

（25）今さら教えてもらってなんになんネン。　［反語］
　　（今さら教えてもらって何になるの）

［反語］も、［非難］と同様に聞き手への情報要求機能を持たないところに特徴がある。また「聞き手に強く主張する」（傍点筆者）と安達（前掲）にあるように、話し手の伝達態度が示される点でも、［非難］と共通しているといえる。

3.2.2.　ノダ補充疑問文の用法と形式の偏り

前節において、ノダ補充疑問文に四つの用法があることをみた。ノダ補充疑問文が［質問］［詰問］［非難］［反語］のいずれに解釈されるかは文脈に依存するところがある。ただし上昇調の文末イントネーションをとる場合は、ン・ノンともに［質問］の解釈しか許されない（ネン・テンはそもそも上昇調をとらない）。

（26）明日何時に起きる｛ン／ノン｝？　［質問］（＝（17））

（27）［なかなか注文が決まらない聞き手に］
　　何飲む｛#ン／#ノン｝？はよ決めーや。　［詰問］（＝（21））

（28）お前、いつまで寝てる｛#ン／#ノン｝？　［非難］（＝（23））

（29）今さら教えてもらってなんになる｛#ン／#ノン｝？　［反語］（＝（25））

非上昇調の場合は、ン・ノン・ネンのいずれの形式も文脈次第で四つの用法すべての解釈が可能であり、どの形式をどの用法で使用しても、不適格あるいは不適切とまではいうことができない。ただし実際の運用においては用法ごとに使われるノダ相当形式に偏りがあり、その点で形式と機能に一定程度の結びつきがあるといえそうである。すなわち、文脈を離れてもンが［質問］と解釈されやすいのに対して、ネン・テンだと［詰問］［非難］［反語］という解釈が先に立つ。ノンは、［非難］［反語］よりも［質問］［詰問］としての解釈が優先されるのである。

（30）明日何時に起きる｛ン／ノン／?ネン｝。　［質問］（＝（17））

（31）［なかなか注文が決まらない聞き手に］

3）安達（2005:35）は補充疑問文が反語解釈になりやすいケースとして次のようなものを挙げている；①主格に疑問語（誰・何）が来る、②述語が可能動詞・存在動詞である、③理由の疑問語（どうして・なぜ）をとる、④「どこに＋存在動詞」という構造をとる、⑤「どこが＋形容詞」という構造をとる、⑥「何になる」という定型表現。これらは大阪方言にも当てはまると思われる。

何飲む｛ン／ノン／ネン｝。はよ決めーや。　［詰問］（＝（21））

（32）お前、いつまで寝てる｛ン／ノン／ネン｝。　［非難］（＝（23））

（33）今さら教えてもらってなんになる｛?ン／?ノン／ネン｝。　［反語］（＝（25））

もちろん、ネンを使った場合でも［質問］として機能しないわけではないため、文脈の支えがあれば（30）のネンを［質問］と解釈することも不可能ではない。しかしン・ノンに比べるとぞんざいな（きつい）尋ね方になることから、やはり補充疑問文におけるネンの機能は［詰問］［非難］［反語］に偏っているとみることができよう。同様にンを用いた疑問文でも口調によっては［詰問］にもなりうるし、文脈の支えがあれば［非難］の疑問文と解釈することもできなくはない。しかし［反語］としての解釈は、ネンに比べるとかなりしにくいように思われる。ノンの場合も同様に、［非難］としての解釈はできなくないが［反語］の解釈はやや難しく、（33）のノンをネンと比べると何らかの情報を要求しているように感じられる。これはすなわち［詰問］の解釈が優先されることの表れである。

以上のことをまとめると表 1 のようになる。●印は当該形式を用いた場合に他よりも優先される解釈であることを示す。

表１　ノダ相当形式の違いにみるノダ補充疑問文の用法の偏り

	質問	詰問	非難	反語
ン？	●	×	×	×
ノン？	●	×	×	×
ン	●	○	○	△
ノン	●	●	○	△
ネン・テン	△	●	●	●

凡例　？：上昇調の文末イントネーション、●：解釈として他より優先される、
○：使用可能、△：やや使用しにくい、×：使用不可

いま、ンによる補充疑問文の機能が［質問］に偏ると述べたが、ンが質問（だけ）のマーカーであると主張しているのではないことに注意されたい。大阪方言にはノダ相当形式のつかない補充疑問文も存在するし、場合によってはノダのない補充疑問文でなければ不適切になることもある。たとえば話し手と聞き手が二人で相談をしているときなどは（34）のようにノダのない補充疑問文を使う必要がある。

（34）［相談を持ちかけて］来週、お花見どこ｛行く／#行くン｝？

ンは補充疑問文を作るために必須の要素ではなく、あくまでも説明のモダリティとしての機能を担っている[4)]。大阪方言の場合、複数あるノダ相当形式が先行文脈と文との関連づけを表す形式として機能しつつ、形式の違いによって［質問］［詰問］［非難］［反語］という、

4）岡本（2015）は若年層の備前方言における補充疑問文の文末形式ンナラについて、ナラの終助詞化が進んだ結果、ンが「質問」を担い、ナラが「非難」を担うに至ったと述べている。しかし筆者の考えでは、備前方言でも例文（34）のような場合は非ノダの補充疑問文が適切になることが予想される。

ノダ補充疑問文のもつ複数の用法を表し分ける傾向にある、とまとめることができる。

4.　ナの接続・イントネーションと用法

本節では、ノダ補充疑問文に使われるナの接続とイントネーションについて高木（2018）にもとづいて整理し（4.1 節）、そのうえでナの用法について考える（4.2 節）。

4.1.　ナの接続とイントネーション

繰り返し述べてきたように、疑問文に使われる終助詞ナはノダ補充疑問文とだけ共起する。補充疑問文に使用できるノダ相当形式にはノ（ヤ）・ン（ヤ）・ノン・ネヤ・ネンがあるが、このうち、ナが後接できるのは原則としてン・ノン・ネンの 3 形式である（高木 2018）。

（35）いつ行く｛*ノヤ／*ノ／*ンヤ／ン／ノン／*ネヤ／ネン｝ナ。

ただし例外もあり、ノダ相当形式が名詞句および形容動詞に接続する場合はナの接続がノンとネンに限られ、ンとは共起しない。大阪方言では、名詞句や形容動詞（語幹）のあとにノダ相当形式が来るときは両者をつなぐために断定辞が必須であるが、ンとノン・ネンとでは接続する断定辞が異なっており、それぞれ「ナン／ヤノン／ヤネン」となる（野間 2014 も参照）。そしてこの 3 形式のうち「ナン」には終助詞のナが接続できないのである。

（36）どれがあんたの｛*傘ナン／傘ヤノン／傘ヤネン｝ナ。

（37）なんでこんな｛*静かナン／静かヤノン／静かヤネン｝ナ。

また 3.1 節で述べたように、用言のタ形にはノン・ネンが接続できず、否定辞のン・ヘンにはンが接続できないので、「タ形ノンナ」「タ形ネンナ」「否定辞基本形ンナ」もそれぞれ不適格となる（ネンの場合は代替形式のテンが使われ、テンナとなる）。

（38）昨日どこ行っとった｛ン／*ノン／*ネン｝ナ。（昨日どこに行っていたの）

（39）昨日どこ行っとっテンナ。

（40）なんでわからん｛*ン／ノン／ネン｝ナ。

（41）なんでわからへん｛*ン／ノン／ネン｝ナ。

こうした統語上の制約をまとめると表 2 のようになる。接続の面において、ネンナがテンナという代替形式をもち、前接形式に制限がないのに対して、ンナ・ノンナには一部制限があり、かつその制限はンナとノンナとで相補的になっている。このことはンナとノンナとが意

表 2　補充疑問文におけるノダ相当形式とナの接続

	前接形式			
	動詞・形容詞 基本形	用言 タ形	断定辞ヤ※ 連体形・基本形	否定辞ン・ヘン 基本形
ンナ	○	○	×	×
ノンナ	○	×	○	○
ネンナ	○	(テンナ)	○	○

※ンが接続する場合は連体形（ナ）、ノン・ネンが接続する場合は基本形（ヤ）になる。

凡例　○：適格、×：不適格

味的な共通性を持って、接続環境によって互いを補い合う関係にあることを窺わせるが、その一方で動詞・形容詞の基本形には両者がともに接続できることから、ンナ・ノンナ・ネンナの 3 形式が意味的に対立している可能性も捨てきれない。これについては次節以降で検討したい。

最後に、文末イントネーションについては、ノダ補充疑問文に生起するナは上昇調を取ることができないという制限がある。

（42）*誰が買う｛ン／ノン／ネン｝ナ？

（43）誰が買う｛ン／ノン／ネン｝ナ。

上昇調のネンナが不適格となるのは、ネンが単独でも上昇調を取らないことが一因といえるかもしれない。しかし、（44）に示すように平叙文につくナの場合はネンナとなっても上昇調をとる。

（44）お前が買うネンナ？（お前が買うんだね）

よって、補充疑問文のネンナが上昇しないのはやはりナの特性によるものと考えられる。

4.2.　ノダ補充疑問文におけるナの用法

本節では、ノダ補充疑問文にナが共起した場合の文のはたらきについて、ノダ相当形式の三つのバリエーション（ン、ノン、ネン）に分けてみていくことにする。以下では、ンによるノダ補充疑問文にナが接続したものを「ンナ」、ノンによるノダ補充疑問文にナが続くものを「ノンナ」、ネンを用いたノダ補充疑問文にナがついたものを「ネンナ」と略称する。

4.2.1.　ンナの場合

まず［質問］の発話におけるナのはたらきについて考える。ナは、以下に示すように、会話の冒頭ではなく第二発話以降に使われることが多い。

（45）［文化祭の出し物について話していて］

1A：お前のクラス何やるか決まった？

2B：うん、お化け屋敷。

3A：えー、ベタやな。

→4B：お前のクラス何やる｛ンナ／ン｝。

この例では、文化祭でお化け屋敷をやることに対して A が「ベタやな」（ありきたりだ）とマイナス評価を下し、これに対して B が「そういうお前のクラスは何をやるんだ（お化け屋敷をありきたりと評することができるだけの特別な出し物をやるのか)」と問い返している。ン単独の疑問文が単に情報を要求する文としてはたらくのに対して、ンナを用いると、情報要求に加えて相手の発言を不審に思っているような響きがある。

類例として次のような使い方もある。

（46）A：明日雨かー。出かけんのめんどくさいな。

B：え？明日どこ行く｛ンナ／ン｝。

ン単独に比べ、ンナは「明日出かける予定があるとは聞いていないが、いったいどこへ行くんだ」と問うような表現になる。ン単独がどこかへ行くという前提に立ったうえでその行き

先について尋ねるのに対して、ンナはその前提自体を訝しく思いつつ問うのである。

ンナは、話し手にとって不明なことがらをあらためて尋ねるような場合にもよく使われる。先の（45）では聞き手の反応を不満に思いながら問いかけるときにンナが使われていたが、聞き手に対して特段の不満がないときでもンナを用いることはできる。

（47）［文化祭の出し物について話していて］

1A：お前のクラス何やるか決まった？

2B：うん、お化け屋敷。

3A：あ、よかったーかぶらんで。（あ、よかった重複しなくて）

→4B：お前のクラス何やる｛ンナ／ン｝。

ここでは、自分が聞き手に情報を与えたのと同じく、知りたい情報を自分にも与えるよう求める場合にンナが使われている。ン単独に比べてンナは聞き手に答えを催促するような問い方になる。次例も同様である。

（48）［歓迎会の準備をしている二人の会話］

1A：出欠の返事みんな来た？

2B：うん、今日の朝んなってやっと全員のん揃ったわ。

3A：みんなぎりぎりやな。

4B：まあ自分もたいがいやから、人のこと言えんけどな。

→5A：ほんで出席者何人になった｛ンナ／ン｝。

このようにンナは、相手の発言の背景や前提に対する訝りを表明したり、答えを催促したりするときに使われる。また次例のような使われ方もある。

（49）［B が飲み会に遅れて参加した］

A：お疲れー。何飲む？（お疲れさま。何を飲む？）

B：何飲も。ていうかみんな何飲んでるンナ。

（何を飲もう。というか、みんなは何を飲んでいるの）

この例では、自分が何を飲むか決めるために、先に来ていた人たちの飲んでいるものについての情報を求めている。このように「把握すべき情報がまだ得られていない」ということを示す際にもナが使われる。

第二発話以降に現れることが多いとはいえ、ンナが第一発話に現れないわけではない。第一発話にンナが使われると、「前にも尋ねたが情報が得られなかった」「当然得ておくべきはずの情報がまだ得られていない」といったニュアンスを帯びる。この点では第二発話以降に使われるンナと共通している。

（50）→1A：今度の連休どこ行くンナ。

2B：んー、やっぱりどっこも行かんとくわ。

（んー、やっぱりどこにも行かないことにするわ）

3A：えー、いろいろ情報集めとったやん。

（えー、いろいろ情報を集めていたじゃない）

（51）→1A：明日何時に起きるンナ。

2B：えーとな、6 時半。

3A：はや。目覚ましかけときやー。（早い。目覚ましをかけておきなよ）

したがって、初対面の人や駅で偶然出会った友人との会話の冒頭でンナを用いることは適切ではない。

（52）［初対面の人に話しかけて］名前、何て言う｛#ンナ／ン｝。

（53）［駅で偶然出会った友人に］どこ行く｛#ンナ／ン｝。

初対面の人との会話でもたとえば、初めに名前を尋ねそびれ、しばらく会話をしてから名前を尋ねるような場合であればンナも適切である。これは「得ておくべきはずの情報がまだ得られていない」という尋ね方が自然になるからであろう。

（54）［初対面の人との会話が途切れて］ほんで名前、何て言う｛ンナ／ン｝。

また（53）でも、話し手に「こんな場所で／時間に出会うなんて」というような驚きの気持ちがあればンナを使うことができる。「得ておくべきはずの情報が得られていない」ために状況が理解できないということが、驚きの表示と結びつきやすいのだと思われる。

（55）［思いがけない場所でばったり出会って］え、なんで？どこ行く｛ンナ／ン｝。

ここまで［質問］の例をみてきたが、［質問］におけるンナは、聞き手が既に有している情報が話し手にまだ得られておらず、そのことを話し手が訝っているということを伝えている、とまとめられる。その「情報」は、事態成立の前提であることもあれば、状況からみて話し手が得ておくべきものであることもあるが、いずれにせよ、情報が得られていない状況を話し手が不審に思っているということがナによって表明されているのである。本稿ではこれを「訝りの表明」と呼んでおく（「疑い」ではなく「訝り」とする理由については 5 節で述べる）。

さて、ンナは、［詰問］と解釈できる文にも使われる。

（56）「やるやる」ゆーて全然やれへんけど、いつやる｛ンナ／ン｝。

（「やるやる」と言って全然やらないけど、いつやるの）

（57）ちょっとあんた、A ちゃん泣いてんで。何した｛ンナ／ン｝。

（ちょっとあんた、A ちゃんが泣いてるよ。何をしたの）

（58）こんな夜中にどこ行く｛ンナ／ン｝。

（59）これとこれ、どっちにする｛ンナ／ン｝。ええかげんはよ決めて。

（これとこれ、どっちにするの。いいかげんに早く決めて）

［詰問］と解釈できる例におけるンナは、ン単独の場合よりも強く問いただすようなニュアンスになる。ナによって、情報が得られずにいることに対する話し手の訝りを示すことが、聞き手に対する話し手の批判的な態度と結びつきやすいのだと思われる。

一方［非難］の場合、ン単独とンナとで伝え方に違いはあるものの、ンナによって相手を強く責めるようなニュアンスになるというわけではない。次の（60）と（61）のンナには「自分には理解できない」というようなニュアンスがあり、強い非難というよりは、呆れ、突き放す表現と感じられる。

（60）ただでさえ落ち込んでんのに、なんでそんなこと言う｛ンナ／ン｝。

（ただでさえ落ち込んでいるのに、なぜそんなことを言うの）

（61）あんたいつまで寝てる｛ンナ／ン｝。

3.2 節でみたように、［非難］は聞き手に対する話し手の批判的な態度を提示するものであり、(60)（61）は「言うべきでないことを言う理由」や「寝るという行為が終了する時間」についての情報を求めているわけではない。しかしン単独の表現は依然として、ことば（謝罪）や行動（起きること）など、聞き手からのなんらかの反応を求めているように感じられる。これに対してンナでは聞き手の反応はとくに求められておらず、「なぜそのような言動をするのか理解できない」といった話し手の不審な気持ちだけが述べられている。「呆れ」や「突き放し」のニュアンスがあるのはそのためである。

ンナには、次例のように［反語］と解釈できそうなものもあるが、後述のネンナに比べると情報要求のはたらきが感じられ、結果としては［詰問］の解釈が優先されることになる（この点はン単独の場合も同様である）。これはンによる補充疑問文の用法が［質問］に偏ることと関連しているものと思われる。

（62）そんなめんどくさい仕事、誰がやる｛?ンナ／?ン｝。

cf. そんなめんどくさい仕事、誰がやんネンナ。

以上をまとめると、ンナにおける終助詞ナは、話し手にとって不明なことがらがある場合に、その情報が得られていないことに対する訝りを表すのだといえる。［質問］において事態の前提を問う場合や情報提供を催促するような場合に使われること、［詰問］の用法となじみがよいこと、［非難］において呆れや突き放しのニュアンスを帯びることなどは、すべてこの「訝りの表明」に起因するものとみることができる。

4.2.2.　ノンナの場合

ノンナは、先にみたンナと同じく［質問］の疑問文に使うことができる。ただ、ンナに比べると事態の成立を疑うようなニュアンスがより強く感じられる。

（63）［文化祭の出し物を否定的に評価されて］お前のクラス何やる｛ノンナ／ンナ｝。

（64）［明日出かけると聞いて］え？明日どこ行く｛ノンナ／ンナ｝。

そのため、前提を問う文脈においてノンナが使いにくい場合がある。次例の場合、ノンナを使うと「のんきに酒を飲んでいる」と非難しているように感じられ、やや使いにくい。

（65）［遅れて参加した飲み会で、飲みたいものを尋ねられて］

ていうかみんな何飲んでる｛?ノンナ／ンナ｝。

同じく第一発話における使用でも相手を問い詰めているように感じられることから、ンナに比べて許容度が落ちる。

（66）A：今度の連休どこ行く｛?ノンナ／ンナ｝。

B：んー、結局家おることにしたわ。

（67）A：明日何時に起きる｛?ノンナ／ンナ｝。

B：えーとな、6 時半。

逆に、何度も相談したのに結論が出ず苛立っている場合や、繰り返し尋ねたにもかかわらず返答が得られないことを不満に思っているときなどは、ンナよりもノンナが使われやすい。ノンナは［質問］よりも［詰問］や［非難］という解釈になりやすいのである。

ただし、［詰問］の解釈が［質問］に先んじるのはノン単独でも同じである（3.2 節）。ノ

ンナの場合は、情報を要求することよりも情報が得られないでいることに対する話し手の訝りが前面に出るところに特徴がある。

（68）「やるやる」ゆーて全然やれへんけど、いつやん｛ノンナ／ノン｝。

（69）こんな夜中にどこ行く｛ノンナ／ノン｝。

（70）これとこれ、どっちにすん｛ノンナ／ノン｝。ええかげんはよ決めて。

［詰問］は話し手の批判的な態度を含みつつもあくまでも情報要求としてはたらく疑問文であるが、ノンナの情報要求のはたらきはノン単独よりも小さく感じられる。これはナの付加によって話し手の心的態度の伝達に重きが置かれるためであろう。結果的に聞き手の反応が得られるとはいえ、［質問］や［詰問］におけるナのはたらきは、聞き手の言動や話し手の置かれた状況に対する訝りの表明にあるということができる。

このことはノンナによる［非難］の例をみてもわかる。ノン単独でも文脈次第では［非難］とも解釈できるが、ノンナを用いると、その発話が「情報要求ではない」ということが（文脈を離れても）明示的になる。

（71）ちょっと、何食べてん｛ノンナ／ノン｝。（ちょっと、何を食べているの）

（72）なんでゆーたとおりにやってくれへん｛ノンナ／ノン｝。

同様にノンナは［反語］としても機能する。ノン単独では情報を要求しているように感じられて［反語］の解釈がややしにくいが、ナを付加することによって話し手の心的態度の伝達が優先され、［反語］としての解釈がより自然になる。

（73）そんなうまい話がどこにあん｛ノンナ／?ノン｝。（そんなうまい話がどこにあるの）

（74）人に親切にして何があかん｛ノンナ／?ノン｝。（人に親切にして何がいけないの）

以上の観察から、次のことが指摘できる。まず、ノンナの解釈が［質問］よりも［詰問］に偏るのは、ナの問題ではなくノン自体の性格によるものである。次に、ノン単独と比較して、ノンナは［非難］［反語］といった情報を要求しない用法にもより自然に使うことができる。これは、「状況に対する訝り」を表す終助詞ナのはたらきによってもたらされるものである。

4.2.3.　ネンナの場合

ネンを用いた補充疑問文が［詰問］［非難］［反語］と解釈されやすいことはすでに述べたとおりである（3.2 節）。ネンナも同様にこれらの用法で使用することができるが、興味深いことに、ネン単独と比べると話し手の批判的な態度の表明が和らげられる。

［詰問］

（75）おいお前、どこ行く｛ネンナ／ネン｝。

（76）どこ｛行っとっテンナ／行っとっテン｝。心配してんぞ。
（どこに行っていたの。心配したんだぞ）

［非難］

（77）あんた何やってん｛ネンナ／ネン｝。（あなた何をやっているの）

（78）自分が悪いのに、なんで人のせいにすん｛ネンナ／ネン｝。
（自分が悪いのになぜ人のせいにするの）

［反語］

（79）こんな時間に誰が来ん｛ネンナ／ネン｝。

（80）車ないのにどうやって行く｛ネンナ／ネン｝。

「批判的な態度の表明が和らげられる」というのは、ネン単独に比べてネンナの方が柔らかい・優しい表現という意味ではない。ネン単独とネンナを対照してみると、ネンナには、状況に対する話し手の不審な気持ちが表れており、［詰問］［非難］［反語］よりもその心的態度の伝達が前面に出る。（75）の場合、聞き手がどこかへ行こうとしているのを見て、その行き先について情報を求めているのに加えて、「なぜ行こうとしているのか自分には理解できない、不審である」という話し手の心的態度が伝達されている。［非難］の場合も、聞き手の言動を批判しつつ、その言動が自分の理解を超えるものであることを伝えている。［反語］も同様に、「誰も来ない」「行きようがない」という話し手の強い主張とともに「なぜそのことがわからないのか」という話し手の訝りが表されている。

4.2.1 節で［非難］のンナについて、聞き手の反応をとくに求めない表現になっていることを指摘した。ネンナも同様に、「自分は訝っている」という話し手の心的態度を述べ伝えることが主眼であり、「責める」「強く主張する」といった［非難］や［反語］のはたらきがネン単独に比べて相対的に弱い。次例も参照されたい。

（81）［オーストラリアの都市についてさんざん説明した後で］

1A：せやからな、なんべんも説明してるけど、オーストラリアの首都はキャンベラちゅうとこやねん。シドニーでもメルボルンでもないねん。

（だからね、なんべんも説明してるけど、オーストラリアの首都はキャンベラというところなの。シドニーでもメルボルンでもないの）

2B：あ、そうか、ほなシドニーはニュージーランドの首都か。

（あ、そうか、じゃあシドニーはニュージーランドの首都か）

→3A：なんでや｛ネンナ／ネン｝。シドニーはオーストラリアやてさっきゆーたやん。

（なんでなの。シドニーはオーストラリアだってさっき言ったじゃない）

（82）さっきからなんべんも説明してんのにわかれへんて、どないや｛ネンナ／ネン｝。もうええわ。

（さっきからなんべんも説明してるのにわからないって、どうなの。もういいわ）

（83）そないな借金してからに、どないすん｛ネンナ／ネン｝。

（そんな［多額の］借金をして、どうするの）

上例の「なんでやネンナ」「どないやネンナ」「どないすんネンナ」などは、現状を嘆き、愚痴をこぼすような場合によく使われる。ネン単独とは異なり聞き手からの反応もとくに求めておらず、「聞こえよがしの独り言」とでも言えそうなものである。こうした表現効果も、ナのはたらきによってもたらされるものとみることができる。

さて、ニュートラルな［質問］としては使いにくいネンであるが、ネンナになると［質問］にも使うことができる。ただし聞き手の言動に対する不審な気持ちが表されるため、その使用には制限がある。

(84)　［文化祭の出し物を否定的に評価されて］お前のクラス何やん｛ネンナ／ネン｝。

(85)　［文化祭の出し物が重ならなくてよかった、という相手に対して］
お前のクラス何やん｛ネンナ／#ネン｝。

(86)　［歓迎会の準備をしていて］ほんで出席者何人になっ｛テンナ／#テン｝。

(87)　［飲み会に遅れて参加し、飲み物の注文を尋ねられて］
ていうかみんな何飲んでん｛#ネンナ／#ネン｝。

(84) の場合は、自分のクラスの出し物を否定的に評価されたことに対する不満を表すために（ぞんざいな［質問］として）ネンを単独で用いることも可能であるが、(85) のように聞き手に対する批判的な評価のない場合は、ネン単独では使えない（使用者の社会的属性によっては許容される場合もあるが、荒っぽい［質問］である）。(86) のテン単独も同様である。一方ネンナ・テンナは、末尾のナの存在によって発話全体が「訝りの表明」となり、「必要な情報が得られていない」ということを表す［質問］としての使用が可能になる。

このようにネンナは、ネン単独に比べると使用できる範囲が広くなり、話し手の批判的な態度の表明が和らげられるという特徴がある。ネン単独の［詰問］［非難］［反語］は聞き手に対する批判的な態度を表すが、その伝達のあり方はン単独やノン単独よりも厳しいものである。しかしこれにナがつくと、発話全体は「自分には理解できない」という訝りの表明となり、これが場合によっては呆れや突き放しのような効果をもたらす。ネンナが現状に対する嘆きや愚痴、ぼやきの表現としてよく使われるのもナによる効果である。

4.3.　本節のまとめ

ここまで、ンナ・ノンナ・ネンナの三つについて、ノダ相当形式単独の場合と比較しつつそのはたらきをみてきた。それぞれが使用される用法をまとめると表 3 のようになる。単独形式のもつ用法（表 1）と対照すると、「ノダ相当形式＋ナ」の方が使用できる範囲が広くなっていることがわかる。

表 3　補充疑問文における「ノダ相当形式＋ナ」の用法

	質問	詰問	非難	反語
ンナ	○	○	○	▽
ノンナ	▽	○	○	○
ネンナ・テンナ	▽	○	○	○

凡例　○：使用可、▽：条件付きで使用可

ただし、これは「ノダ相当形式＋ナ」が［質問］［詰問］［非難］［反語］の用法を担っているからではない。そうではなく、ノダ相当形式とナのもつ意味機能が組み合わさることで語用論的な効果が得られるためにそれぞれの用法において使用できるようになるとみるべきである。

ところで 4.1 節において、ノダ相当形式とナの接続に一部制限のあることをみた（表 2）。

［詰問］［非難］［反語］のようにネンナ・テンナが使用可能な用法の場合、ンナ・ノンナの接続制限をこれによって補うことが可能である。以下、断定辞とタ形に続く例を挙げる。

(88) これ誰の財布｛*なンナ／やノンナ／やネンナ｝。　［詰問・断定辞］

(89) a. こんな高いもん、いつ買った｛ンナ／*ノンナ｝。

b. こんな高いもん、いつ買っテンナ。　［詰問・タ形］

(90) 昼ラーメンやったのに、なんでまた夜もラーメン｛*なンナ／やノンナ／やネンナ｝。　［非難・断定辞］

(91) a. 今まで何やっとった｛ンナ／*ノンナ｝。なんもできてへんやん。

b. 今まで何やっとっテンナ。なんもできてへんやん。

（今まで何をやっていたの。何もできていないじゃない）　［非難・タ形］

(92) こんなこともできひんくせに、何がプロ｛*なンナ／やノンナ／やネンナ｝。

（こんなこともできないくせに、何がプロなの）　［反語・断定辞］

一方［質問］では、表 3 にまとめたようにノンナやネンナ・テンナが使用しにくい場合があるが、断定辞や否定辞のようにンナを伴うことのできない形式が述部に来るときは、ノンナがこれを補って使用される。ネンナを使用するとぞんざいな問い方になり、［質問］よりは［詰問］と解釈されやすい。

(93) 次の休みいつ｛*なンナ／やノンナ／?やネンナ｝。　［質問・断定辞］

(94) なんで行くの嫌｛*なンナ／やノンナ／?やネンナ｝。　［質問・断定辞］

(95) だれが行かへん｛*ンナ／ノンナ／?ネンナ｝。　［質問・否定辞］

また逆に、ンナ、ノンナ、ネンナ・テンナのいずれもが接続できる動詞・形容詞基本形の場合は、ノダ相当形式単独のときと同様に、優先される解釈が形式ごとに異なるように感じられる。たとえば次の場合、ンナが［質問］、ノンナが［詰問］、ネンナが［非難］［反語］の表現として解釈されやすい。

(96) どこ行く｛ンナ／ノンナ／ネンナ｝。

このように、それぞれの形式で優先される解釈は、ノダ相当形式単独の場合のそれと似通っていることがわかる。

5. 考察：ナの文法的意味

前節では、ノダ補充疑問文に現れるナが話し手の「訝り」を表していることを指摘した。ここでは、先行研究における記述と対照させながら「訝りの表明」について詳しく検討する。

2 節で触れたように、野間（2014）ではンナ・ノンナ・ネンナが「反語的な意味を含む」とされている。ノダ相当形式単独に比べると［反語］や［非難］としての解釈が［質問］や［詰問］より優先されることは 4 節でみたとおりである。しかしそれはナそのものに［非難］や［反語］の意味が含まれているためではなく、ナが付加されたことでナによる心的態度の伝達が優先され、情報要求としてのはたらきが弱くなるためである。

本稿ではナのはたらきを「訝りの表明」とした。「訝り」とはつまり「疑わしく思うこと」である。ノダ補充疑問文におけるナは、事態成立の前提となっていることがらや聞き手の言動、話し手を取り巻く状況に不審なところがある、と聞き手に伝えるはたらきをしている。

類似の概念に「疑いの表出」や「疑念表示」があり、山口（2013）では和歌山市方言のナの基本的意味を「疑いの表出」としている。山口（前掲）は、典型的な［質問］の疑問文が以下の二つの条件を満たすことを前提に、ナによる疑問文がこのうちの②を欠いていると指摘する。

① 話し手にとって不明なことがらがあり、そのために事態に対する話し手の判断が成立しないこと

② 聞き手に情報を求めることで、①の問題を解消しようとすること

上記①の条件だけを満たす、いわゆる「疑いの疑問文」は、聞き手に情報を求めることを本質としないので、聞き手が情報を持っている可能性の低いことがらを命題にとることも可能である。次例は標準語の「かな」の例である。

（97）A：新札っていつごろから出回るのかな。

B：ねえ、早く使ってみたいよね。

これに対して大阪方言の「ノダ相当形式＋ナ」は疑いの疑問文としては機能しない。ンナを使うときは必ず、聞き手がその情報を持つものと見なされている。

（98）新札っていつごろから出回るンナ。

また山口（2013）は、次の二つの例を比較し、（100）でナが不適切になることもナの問いかけ性の低さによると分析している。

（99）［初めて聞き手に尋ねて］この荷物、どこに運べばいいンナ。

（100）［何回も聞き手に尋ねたが返事をくれず］

だからこの荷物、どこに運べばいい｛ン／#ンナ｝。

（山口 2013:60-61、例文（28）（28’））

山口（前掲）は和歌山市方言のナを標準語の「かな」になぞらえて、本来的には問いかけ性をもたないものが、対話の場で使用されることで語用論的に質問として機能する、と述べている。しかし大阪方言の場合は（100）でも問題なくンナを使用することができる。

4 節でみたように、大阪方言のナにも疑問文の問いかけ性を抑えるようなはたらきがあることはたしかだが、大阪方言のナは、和歌山市方言のそれとは違って疑問文そのものを作る要素とはいいがたい。大阪方言のナが表すのは命題そのものについての疑いではなく話し手をとりまく状況に対する疑いであり、聞き手にそのことを伝達するのがナの機能である。本稿で「疑い」ではなく「訝り」という表現を用いるのは、この区別を明示的にするためである。

和歌山市方言と大阪方言を対照すると、前者のナが疑いの疑問文を構成する要素であるのに対して、後者のナは疑問文の末尾につくモダリティとしての性格がつよい。ナが補充疑問文の述語形式（断定辞の条件形）ナラに由来することを考えると、和歌山市方言のナはその出自に近い文法的性格を今も備えているものとみられる[5)]。

5） このことは、ンだけでなく広く体言相当の語に接続できるという統語的な特徴にも現れている。

6. まとめと今後の課題

本稿では大阪方言のノダ補充疑問文と終助詞ナを対象に、ノダ相当形式のバリエーションと疑問文の用法の関連を整理し、そのうえでナのもつ文法的な意味について考察した。本稿で明らかになったのは次の点である。

まずノダ補充疑問文の用法として［質問］［詰問］［非難］［反語］の四つの用法があることを示し、ノダ相当形式のバリエーションのうち、ンが［質問］、ノンが［質問］［詰問］、ネンが［詰問］［非難］［反語］の用法にそれぞれ偏って使用されることを指摘した。そして、ン・ノン・ネンが終助詞ナと結びついたときにはその偏りが軽減され、ンナ・ノンナ・ネンナの 3 形式がいずれも上記の 4 用法にまたがって使用されることを示した。さらに、ンナ・ノンナ・ネンナの用法をノダ相当形式単独の用法と対照し、ナのはたらきが「訝りの表明」にあると結論づけた。

ナは、その統語的な振る舞いから、補充疑問文の述語形式としての断定辞の条件形が終助詞化したものであることが推察される。大阪方言だけをみてそのプロセスを辿ることは難しいが、近隣諸方言との対照によってこれを描くことは可能かもしれない。和歌山市方言をはじめとする近隣諸方言におけるナの用法、あるいは現在進行中の変化が報告されている岡山県備前方言のナラの終助詞化プロセスなどもふまえて今後考察を深めたい。なお、岡本（2015）は備前方言のナを「非難」のマーカーとしていたが、広島方言などでもナラは非常にきつい非難の表現になるという[6)]。同じ補充疑問文の述語形式に由来する終助詞が各地でどのような意味を担うに至ったのか・担いつつあるのかという点についても留意する必要がある。

また大阪方言では、ナ単独で使用できる範囲は限られているものの、イナ、カイナ、ワイナ、ガナのようにナを構成要素としてもつ複合終助詞は複数ある。いずれも上昇イントネーションをもたない終助詞であり、意味の面においても、行為指示表現に現れるイナについて「なぜそのようなことをするのか」という呆れや訝りのニュアンスがあることを牧野（2009）が指摘しており、共通点が見いだせる。複合終助詞を構成するナを本稿で扱ったナと同じものとみてよいかどうかについては検討の余地があるが、これら複合終助詞の用法にも目を向けつつ、大阪方言の終助詞ナの意味記述を精緻なものにしていきたい。

付記 本稿は JSPS 科研費 26244024 による研究成果の一部である。

【参考文献】

安達太郎（2005）「疑問文における反語解釈をめぐる覚え書き」『京都橘女子大学研究紀要』31，pp.36-50，京都橘女子大学.

井上優・小西いずみ（2006）「疑問表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック 2』pp.189-209，科学研究費基盤研究（B）「方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究」成果報告書.

6） 関西大学の日高水穂先生のご教示による。

岡本進（2015）「岡山備前方言における疑問詞の係り結びについて」『思言　東京外国語大学記述言語学論集』11，pp.101-108，東京外国語大学記述言語学研究室.

高木千恵（2018）「大阪方言の補充疑問文と終助詞ナ・イナについて―形態統語的な特徴を中心に―」『待兼山論叢　日本学篇』52，pp.39-56，大阪大学大学院文学研究科.

野間純平（2013）「大阪方言におけるノダ相当表現―ノヤからネンへの変遷に注目して―」『阪大日本語研究』25，pp.53-74，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

――――（2014）「大阪方言における準体助詞ン・ノ・ノン―ノンの分布を中心に―」『阪大社会言語学研究ノート』12，pp.24-36，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

牧野由紀子（2009）「「大阪方言の命令形」に後接する終助詞ヤ・ナ」『阪大日本語研究』21，pp.79-108，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

三宅知宏（2014）「岡山方言の不定語疑問文をめぐって―対照研究的視点をふまえた記述的一般化―」金水敏編『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書（1）』pp.49-68，国立国語研究所.

三宅知宏（2015）「対照方言研究の試み：不定語疑問文をめぐって」『鶴見大学紀要　第1部　日本語・日本文学編』52，pp.左1-左28，鶴見大学.

山口華奈（2013）「和歌山市方言における疑問詞疑問文の文末詞「ナ」」『阪大社会言語学研究ノート』11，pp.57-65，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

【参照ウェブサイト】

国立国語研究所　方言文法全国地図 PDF 版ダウンロードサイト
http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html　（2019 年 06 月 19 日閲覧）

たかぎ　ちえ（大阪大学大学院准教授・大阪大学大学院修了生）